

研究所だより

発行 2012年7月15日
 明治学院大学
 社会学部附属研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
 TEL (03)5421-5204~5

所長 西阪 仰

No.26

あつち

所長 西阪 仰

所長に就任して最初の挨拶を寄稿するのだから、これから2年間の研究所運営の抱負かなにかを語ることが期待されているのだろう。でも、私には、2年間も先のことなど、とても考えられない。

じつは、3月の下旬から4月の中旬にかけて、NHKの番組(2012年5月26日放映)のための取材協力をした。NHKのディレクターの葛城豪さんから、NHKが入手した、オウム真理教団の「内部テープ」の分析を依頼された。膨大なテープの量だったが、とりあえず、葛城さんと相談していくつか焦点を絞った。それでも、分析を施したのは数時間分だった。私の専門である「会話分析」の手法にのっとり、研究チームでまずは、詳細なテープ起しの作業から始めた(研究チームには、研究所の研究員「学術振興会特別研究員」の小宮友根さん、社会学科で非常勤講師をお願いしている早野薫さんも、主要メンバーとして参加いただいた)。テープ起し、分析、議論に

費やした時間は、何十時間になるだろうか。NHKによる取材だけでも、20時間近くに及んだ。

オウム真理教団の事件は、戦後の最重大事件の一つだ。私たちにとって解明すべき「謎」は、なぜ、多くの若者たちが無差別大量殺人にコミットしていったか、という点に尽きる。警察の捜査の遅れもあったかもしれない。麻原彰晃の「教理」は荒唐無稽だったかもしれない。しかし、「地下鉄サリン事件」17年後のいま、問わなければならぬのは、次の点だ。そんな荒唐無稽なことを、複数の「知的な」若者たちが、なぜ最終的に実行するまでにいたったのか。しかも、死刑判決を受けた実行犯の1人は、最初、かなりはつきりと、麻原の「救済の第二の道」という(無差別殺人につながる)考え方に抵抗を示していた。

私たちがNHKに提供した分析は、番組の総時間の制約から、すべて取り上げられてはいない。もちろん、テープからわかることに限界はある。それでもテープの詳細な分析からしかわからないこともある。「救済の第二の道」に、信者の「動機付け」(もちろん、これは納得とは異なる)を動因する「やとり」の構造」を、垣間見ることが、確かにできる。

まったく関係ない私的な告白をしよう。じつは、私の両親の父親、つまり私の祖父は、2人ともプロテスタントイイズムの牧師だった。当然、両親は2人とも(まことに頭の下がる)敬虔なクリスチャンだった。そのような環境のなかで、私は、日本人で、「あえて洗礼を受けないことを決断をした」きわめて稀な人間の1人である。一方、ナザレのイエスが、どのように生きて、どのように死んでいったかは、何十年ものあいだ、いつも気にしていたと思いつづけている。

オウム真理教団に関する仕事は、私にとってはふたたび、人類の根源的なパラドックスとしての「宗教」という問題を直視するきっかけでもあった。オウム真理教はしよせんは「邪教」だったと言っうのは簡単だ。しかし、私には、「人間」が抱える究極的な背理を、オウム真理教団は示しているようにも思える。オウム真理教団におけるコミュニケーションの構造は、ある意味では、ごくごく普通のものである。それも、マインドコントロールの一部だったといえ、そうなのかもしれない。しかし、そのように言ってしまうのは、逆に取り逃がしてしまう、明確な、誰にでも理解可能な構造が、そこにはある。麻原の一見、巧みなレトリックも、じ

つは、私たちが普段用いているもの（「巧みな」）組み合わせにすぎない。さて、オウム真理教団のタイプの分析はとりあえず区切りがついた。が、明治学院大学というキリスト教の大学において、「オウム真理教」がつきつめた問題、すなわち、人間にかかわる根源的問題を、どこまで自分の問題として深められるだろうか。

研究所各部門から

調査・研究部門



2011年度 鹿児島インタビュー調査の様子

今年度から社会学部付属研究所の調査研究部門主任という重責を思いがけず担うことになりました。はたして自分が研究所における調査研究の運営に關してどれほど貢献できるかは心許ないところも多々ありますが、所長や所員の先生方、実務担当および調査研究員のみな

さんのお力を借りつつ、職務を果たしていきたいと思えます。

私はいわゆるフィールド調査のエキスパートではありませんが、言説資料の分析に携わる社会学者として、社会調査をめぐる原理的な問題について少し考えてみましょう。社会科学における調査対象は言うまでもなく人間であり、物理学や化学とは（おそらく動物行動学とさえ）異なる諸問題の一切はこの事実から生じます。すなわち、調査する主体だけでなく調査される客体の側も、意識を持ち、思考する人間であるがゆえに、調査という実践が調査対象に与える影響を原理的に排除できない（もし排除するとすれば、それはそもそも人間を対象とした調査ではなくなってしまう）ということ、そしてまた、調査対象の変化が調査の側にフィードバックされるといふことです。調査主体と調査対象とのこうした相互作用を、科学哲学者イアン・ハッキングは「ループ効果」と呼んでいます。それは、社会学者が用いる概念が、その概念によって記述される人々による自己理解に影響し、調査の前提自体も変化するというダイナミクスを表しています。素朴な実感としても、私たちは自分が何かを質問されることで初めてそこに含まれる事項の存在を

知ったり、それが質問に値することであること自体を発見するということがあるはずですが。社会調査は、すでにあるものを調べるだけでなく、新しい社会をつくり出すという意味でも、それが自体がひとつの社会的実践なのです。社会調査のこうした性質は、自然科学的観点からは単なる厄介事かもしれませんが、社会科学における固有の面白さの源泉であるように思えます。付属研究所の各プロジェクトからも、続々と面白い調査研究が生まれることを願ってやみません。

（調査・研究部門主任 加藤秀二）

相談・研究部門

最近読んだ小説の話から始めます。「まともな家の子供はいない」（津村記久子著 筑摩書房）は、中三女子セキコの目を通して周囲の大人たちの姿を描いている。中三女子、といえば思春期真っ盛り。感情と感覚の針が全身に張り巡らされ、針先は「大人になりにきれない大人たち」に容赦なく向けられる。

リストラを建前に「考え方が合わない」といつかは職場を変え続ける父親。パートで家計をようやく支えているのに、ゲーム三昧の父親には何も言えない母親。友人ナガヨシの母親は買い物

依存症で、娘に買い物や映画につき合ってもらうことでようやく精神のバランスを保っている。優等生ムロタの母親は、

「芳香剤のコマーシャルに出てきそうな」いつまでも若く可愛い主婦に見えるが、近所の男性と不倫をしている、等々。中三女子でなくても、突っ込みどころ満載の大人たち。

ところで、人はいつから「大人」になるのか。かつて中三女子であった私と、人生半ばを超えた私では、お肌の張りも遅刻しそうな時のダッシュの加速も全く違うが、これらは紛うことなく老化であって、大人の証左ではない。真ん中の芯は子供のまま、大人というマントを着せられ、何とか毎日をやり過ごしているだけではないかという不合理な感覚は、未だに抜けない。そんな自分は、子供たちからどんな大人に見えるのか、考えさせられる。

相談・研究部門で、港区及び区内在住の子育てグループの方たちと取り組



2011年度 港区地域こぞって子育て懇親会の様子

んでいる「地域子育て支援事業」は8年目を迎えた。地域というつながりを通して、大人たちは子供たちに何を提示できるのか。そんな問への回答を、一緒に考えていける機会にさせていただければと思っている。

社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会の今年のテーマは「ソーシャルワークにおけるプランニング」である。こちらも、責任ある「大人として」、何をするのか、出来るのかを問い直す作業にしたいところである。

(相談・研究部門主任 大瀧敦子)

学内学会部門

本年度主任となりました。社会福祉学科の松原です。どうぞよろしくお願ひします。学内学会、正式には明治学院大学社会学・社会福祉学会は、1991年に現在のような、教職員、在学生、卒業生から構成される研究・交流組織として創設され、活動を続けてまいりました。学内学会の前身としては、社会学部友の会(1979年創設)、さらにその前の明治学院大学社会学会(1954年創設)があります。その間、活動を中断する時期はあったものの、授業や演習だけではない、そして卒業生を加えた組織的な交流の場形成がなされてきたといえるでしょう。

う。私自身は、社会学部友の会創設の時期に本学に着任しています



2011年度 研究発表会後の様子

が、すでに着任順でいえば、私の先輩となる教員が数少なくなってきた状況にあります。歴史は大切にしながら、一方で新たな活力を得て、学内学会は現在の在校生、卒業生、教職員のニーズを受け止める活動を模索していく必要があるかと思ひますし、それに適した人材の確保も必要かと思ひます。学生部会は年度をまたぎながら新たな担い手を得ることができており、多様な行事の企画立案し、実行してきています。すでに、本年度はスポーツ大会が実施されました。卒業生部会は、主として卒業生交流の場を形成してきていますが、一般の合同役員会では、卒業生部会の役員の方々からも世代交代の必要性が指摘されました。先輩たちの活動を引き継いでいく新たな担い手の確保にわれわれ教員もサポートしたいと考えています。

6月30日には総会が実施されました。今回は社会福祉学科の村上先生の講演もいただきながら、総会に加えて、懇親会も行われました。

また、12月1日には研究発表大会の開催を予定しております。こちらも多数のゼミ、学部学生、大学院生、また社会で活躍する卒業生の参加をお待ちしています。

(学内学会部門主任 松原康雄)

新任挨拶

私が学生だった頃の社会学部付属研究所は、白金キャンパスの一番奥に、うっそうとした西洋庭園に囲まれ建っていました。学生にとっては少々近寄り難く、まさかその研究所で自分が働くことになるうとは、想像もしていませんでした。しかし縁とは不思議なもので、母校を遠く感じるようになった頃、福祉とは全く異なる業界で働きなから、子育てに奮闘している私に声をかけて下さったのが、先輩でもある社会学福祉学科の新保先生でした。

非常勤ソーシャルワーカーとして着任させていたのは2度目です。研究所に勤務させていただいた月日は、私の人生に大きな変化をもたらしました。1度目の任期を終えた後、「果たして自分は何をしたのか?何ができた

のか?」と問いかけ続けていましたが、改めて頂いた機会を大切に、感謝の気持ち忘れず、その問いの答えを出せるよう日々精進したいと思っています。(濱田智恵美)

4月より調査・研究部門の研究調査員として着任しました。社会人類学、とくに開発人類学を専門としています。大学院では、発展途上国の小規模生産者に対して、援助ではなく貿易を通して自立支援をおこなう社会運動であるフェアトレードに注目し、その受益者である、ラオス人民民主共和国のコーヒー生産者のもとで1年半ほどフィールドワークを行ってきました。

調査・研究部門では、おもに特別推進プロジェクトに係らせていただくことになっていきます。プロジェクトでは、これまで行ってきたフィールドワークの経験を活かし、貢献していきたいと考えております。学部生のころは、人類学だけでなく社会学も学んでおりましたが、私にとって社会学は近いようで遠い存在でした。これを機に、社会学の先生方と交流し、多くのことを吸収していくつもりです。まだ不慣れなところもあるかと思いますが、何卒、よろしく願ひいたします。

(箕曲在弘)

市民講座報告・研修会案内

2011年度の港区地域こぞつて子育て懇談会は、港区立子ども家庭支援センターとの共催6回目を迎えました。今回も港区内のママ&パパ22名と学生ボランティアも加わり企画しました。パパ力が注目される中、港区内の

パパグループのプレゼンテーション（地域でつながろう！子どもたちを守ろう！）と、2011年の大震災を踏まえ、災害に備え地域でしておくことを被災地の方から学ぶという内容でした（「みんなで始めたいね」となりの人とのつながりづくり）2012年1

月28日開催、参加者166名。様々なテーマを深めるため、2012年度の懇談会は、分科会形式に変更予定です（2013年1月26日開催予定）。

2012年度の地域こぞつてネットワーク会議（港区内の子育て・子育て支援の関係機関/団体の情報交換と交流の場）では、「港区内の子育て・子育て環境の今」として、外遊び・産後ケアの大切さ・子どもの虐待予防という、いくつかの現場からの話題提供を踏まえ、情報・意見交換を行いました。

二〇一二年 社会学部附属研究所 プロジェクトの紹介

★一般プロジェクト

☆会話分析の訓練技法の開発

（代表 西阪 仰）

☆労働問題研究と教育研究の交錯―「政策学」から「経済学」へ

（代表 稲葉振一郎）

☆インターネットの政治的役割の研究

（代表 宮田 加久子）

☆地域主義の変容―スペインを事例に―

（代表 岩永 真治）

☆被災地高齢者施設への専門職としての支援

（代表 岡本多喜子）

☆更生保護施設入所者の自立更生に向けた支援サービスのあり方研究

―SST実践の効果とその課題―

（代表 八木原律子）

☆島嶼・海洋移動民の近代性に関する基礎研究

（代表 石原 俊）

☆生命の「再生産」概念の研究

（代表 加藤 秀一）

☆EUと欧州評議会の国際社会保障政策の比較研究

（代表 岡 伸一）

☆ステップファミリーの子どもたち―親の離婚（死別）・再婚を経験した子どもたちの家族関係とライフ

コースの社会学的研究

（代表 野沢 慎司）
☆災害福祉の構築に向けた研究―
（代表 明石留美子）

★特別推進プロジェクト
現代日本の地域社会における（つながり）の位相―新しい協働システムの構築にむけて―

二〇一二年 社会学部附属研究所 スタッフの紹介

所長 西阪 仰

調査・研究部門主任 加藤 秀一

相談・研究部門主任 大瀧 敦子

学内学会部門主任 松原 康雄

所員 稲葉振一郎

茨木 尚子

久保 美紀

佐藤 正晴

野沢 慎司

半澤 誠司

村上 雅昭

研究調査員（調査・研究部門） 箕曲 在弘

ソーシャルワーカー（相談・研究部門） 濱田智恵美

副手 平野 幸子

教学補佐 坪井 栄子

事務担当 天野 真希

学内学会部門事務担当 佐々木敬子

第26回 社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会

総合テーマ「ソーシャルワークにおけるプランニングの意義と実際」

日時：2012年10月27日（土） 10：00～16：30

①基調講演 10：00～12：00

②ワークショップ 13：00～16：30

会場：明治学院大学白金キャンパス

基調講演：「ソーシャルワークにおけるプランニングの意義と実際」（仮題）

講師 桃山学院大学 松端克文

ワークショップ

A 「施設における個別支援のプランニング手法を学ぶ」（仮題）

講師：桃山学院大学 松端克文

コーディネーター：明治学院大学 久保美紀

B 「地域ニーズの Assessment とプランニング手法を学ぶ」（仮題）

講師：山梨学院大学 竹端寛

コーディネーター：明治学院大学 茨木尚子

C 「高齢者やその家族の地域支援のプランニング手法を学ぶ」（仮題）

講師：富士宮市地域包括支援センター長 土屋幸己

コーディネーター：明治学院大学 大瀧敦子

連絡先

明治学院大学社会学部附属研究所

〒108-8636 港区白金台1-2-37

Eメール issw@soc.meijigakuin.ac.jp

TEL03-5421-5204・5205 FAX03-5421-5205